1920～30年代における綴方作品評価基準の史的展開

佐　藤　さつき

一，はじめに―問題と視点

1.　生活綴方と評価基準の問題

1920年代から30年代にかけて，公立小学校の教員によって，子どもの文章表現指導にかかわる教育方法が開拓された。これは，のちに「生活綴方」と呼ばれるようになるが，[1] 子どもに生活に取材したひとまとまりの母国語の文章を書かせ，書かせた作品を読ませ聞かせることを通して，正字法(orthography)，書法（calligraphy)，修辞法（rhetoric)の教育だけではなく，教授と訓育を含んだ全体としての教育をおこなおうとするものであった。[2]

小論は，子どもの文章表現指導過程をとりわけ教育の方法として重視するこの教育実践の指導過程の史的展開を明らかにすることを意図している。その際，綴方作品評価基準が何であったのかを，文章表現指導と「生活指導」概念との関係を中心に，綴方「選評」を第一次史料として史的考察を加えることを通して探ろうとするものである。

評価基準を考察することによって，教育方法を明らかにすることは評価観念の成立史と深い関係がある。評価という行為が国家権力の体系や政治の観念から脱却し，教化とは異なる教育の観念としてとりだされてくる過程で，これを推進したのは，まさに綴方教師たちであった。

後述する小砂丘忠義は，子どもが「綴り方を書いた場合，その綴り方には全教育の総量が含まれていると考」え，綴り方を評価する際，「子どもが批評される」のではなくて，「地理や修身や国語やの全教科が，校長はじめ各訓導の全教化が，郷土や国家の全感化が，その批評をうくべきである」[3] と主張した。また，ある綴方教師は，「文壇的批評」を，「子どもの生活の幾層には心を用いず，表現させることが問題であって，それを表現するに至るまでの学級全体へ

の指導，あるいは表現をどう行動として生かしてゆくかといった『教育』としてのほんとの部面，さらに『作品』を『学級』のなかでいかに吟味し，いかに共同生活に役立ててゆくかというようなことには全く無関心である[(4)]」とのべ，自分たち綴方教師のおこなう「教壇的批評」とを峻別している。

彼らの論ずるところにみることができるのは，「評価もまた教育でなければならない」という観念の成立である。ここではじめて，評価も教育の諸過程―教育目標・教育内容・指導方法―と不可分である関係になり，評価がつぎの指導過程に位置づけられていくこととなるのである。

綴方教師の指導体系には，彼らが論争のなかで用いたことばである「表現のための生活指導」と「生活指導のための表現指導」という二つの体系があったことが知られている。これらの指導体系が具体的にどのような指導過程をとるものであったのか，これが第一の問題である。

教育評価の評定尺度には，集団準拠と目標準拠とがあるが，第二に，綴方指導の具体的な次元において，子どもの綴方作品評価の基準，より一般には教育評価の基準がどのようなものであったのかという問題である。

第三に，「生活指導」概念の内実をめぐる問題である。選評指導にあらわれた綴方教師の児童観・生活観がどのようなものであり，それらがどう評価意識を規定していたのか。小論の目的は，以上の三つの課題を明らかにすることにある。

2.『綴方読本』と『綴り方倶楽部』――分析の視点

生活綴方を教育実践としてみる以上，それは一面で社会運動であり，他方で文化運動であるとしても，人間における発達の概念を発見するひとつのあり方にほかならない。1920～30年代につくりだされた子どもの文章表現指導にかかわる教育方法の形態をあつかう際その対象とするのは，綴方教師たちの自覚，無自覚につくりだす指導体系とその思想的性格であり，それらの指導体系の内側から，時に，それらを越えてすい上げられる同時期の子どもや親の発達要求・教育要求である。

ここでは綴方教師たちのしごとをできるだけ生きられた事実の次元でみてゆきたいという考えから，意図された彼らの論評と同時にむしろ具体的に手をそめた綴方選評作業に，教育の思想をも考察する方法をとるのである。

1910年代後半には「日本で最初の組織的計画的児童文化運動」を展開する『赤

い鳥』誌（1918～29，1931～36）が鈴木三重吉主宰で創刊されるが，これは，「大人が書く子どものための」童話・童謡とともに，巻末に子どもからの作文を募り，「選定補修」して誌上に発表するというものであった。三重吉が重視してとりくんだ選定作業によって提示された指導基準が，従来の文範主義，写生主義綴方に対し文芸的リアリズムの綴方を導き，発展させるものであった事実についてはよく知られている。

この『赤い鳥』文章表現指導運動を前史として登場する同じく全国レベルの児童雑誌のうち，ここで注目したいのは小砂丘忠義主宰による『綴方読本』（1930年9月創刊～37年，郷土社）と，千葉春雄主宰の『綴り方倶楽部』（1933年4月創刊～40年，東宛書房）である。

前者は，教師むけ雑誌『綴方生活』（1929年創刊，文園社）の児童雑誌『読方綴方鑑賞文選』（1925年6月創刊，文園社）（以下通称『鑑賞文選』を用いる）が後述する文園社争議を経てだされる第二次『綴方生活』（1930年～37年，郷土社）の児童雑誌として改題したものである。後者は，教師むけ雑誌『教育・国語教育』（1931年創刊～41年，厚生閣）の児童雑誌である。

ところで既に両誌に関して，またとりわけ前誌の発行を担った教育の世紀社および児童の村小学校関係者の活動とその教育思想の構造に関する研究は，蓄積がなされてきている。(5)

中内敏夫氏は，第二次『綴方生活』誌発刊をもって生活綴方教育運動の原点とみ，その発刊前後の事情とそこでうちだされた教育方法の公立小学校制度への定着過程の史的構造を解明した。そこで論じられている小砂丘と千葉の関係をとり上げよう。

『鑑賞文選』誌創刊にあたって小砂丘は編集部員であり，千葉も同誌の顧問であった。後述する『綴方生活』第二次同人宣言発表前後，同人主催による四回にわたる集会には小砂丘が研究発表を，千葉は講師として講座を担当していた。ところが，この講座を担当して感じたあるショックから千葉は『教育・国語教育』誌を創刊するにおよんでいる。(6)

中内氏によれば，「もともと『自由教育』運動の国語科の分野の出身者である千葉春雄の『教育・国語教育』誌が志向していたものは，『綴方生活』第二次同人宣言の世界ではなかった」(7)のであり，その指導過程は，元東京高等師範学校附属小学校の訓導による「随意選題と『赤い鳥』綴方の公立小学校現場への

定着過程を，原型に修正を加えながら指導した[8]」ものであった。

北方性論争は，1933年から『綴方生活』誌や『教育・国語教育』誌を舞台に，北日本国語教育連盟（1934年結成）の提唱した北方性概念をめぐっておこなわれ，教育の地域性をどうとらえるかに始まり近代日本論までを含む論争に進展するものであった。この提唱をもっともはげしく批判したいわゆる南方系の伯西教育社[9]は，「教育方法のうえでは『綴方生活』第二次同人宣言に近い立場を表明しながら，その同人の多くが，実際の組織上のつながりとしては千葉春雄の全日本綴り方倶楽部を構成[10]」していた。

以上のように論じられているにとどまる二つの方法体系のちがいを教育方法の具体的な指導上の問題として整理する必要がでてくるのである。

雑誌編集者の意図とその受け手である読者との相互緊張関係のなかから綴方作品評価基準が形成されるプロセスを分析するためには，雑誌の送り手の側面だけでなく，投稿作品にかいまみることのできる読者の発達要求・教育要求をもあわせて射程に入れなければならないことを断っておきたい。

二，生活綴方評価概念の形成期における評価基準

1．『綴方読本』誌の生活綴方成立史上における位置

1930年9月，それまで『鑑賞文選』誌の出版元であった文園社が解散，社長の志垣寛が追放される事件がおこる。これは文園社争議といわれ，待遇問題や『綴方生活』誌編集方針をめぐる対立がからむものであった。志垣退陣後，小砂丘らは新たに郷土社を創設，一年前に志垣を編集発行人としてだされた第一次『綴方生活』誌に対して，「『綴方生活』第二次同人宣言」が発表され，第二次『綴方生活』刊行，『鑑賞文選』を改題して『綴方読本』刊行の契機となった。

1929年，志垣寛主宰『綴方生活』創刊号の巻頭言「吾等の使命」では次のようにのべていた。

「『綴方生活』は新興の精神に基き常に清新発溂たる理性と情熱とを以って斯界の革新建設を企画する。その目ざす所は教育生活の新建設にあるが，その手段としては常に綴方教育の事実に即せんことを期する。『綴方生活』は教育に於ける『生活』の重要性を主張する。生活重視は実に吾等のスローガンである（傍点―引用者）。」

これに対し，文園社争議を経て小砂丘らによって出された「『綴方生活』第二次同人宣言」は次のようにいう。

「社会の生きた問題，子供達の日々の生活事実，それをじっと観察して，生活に生きて働く原則を吾も摑み，子供達にも摑ませる。本当な自治生活の樹立，それこそ生活教育の理想であり又方法である。吾々同人は，綴方が生活教育の中心教科であることを信じ，共感の士と共に綴方教育を中心として，生活教育の原則とその方法とを創造せんと意企する者である（傍点―引用者）。」

両者は，近代公教育体系の国語科綴方[11]という教科のフレームを不動のものとせず，綴方を文章表現技術の指導をおこなうものとしていない点で共通している。しかし，前者が，教科をたてておこなう近代公教育体系の教育方法を許容した上で「生活」重視を主張しているのに対して，後者は，近代公教育体系のフレームにとらわれず，それをも下からつかみなおす教育の立場であった。第二次宣言は，各教科の独自性を綴方に解消させるもの，また綴方に過重な負担をおわせ国語科綴方の固有の任務をも果たせなくするものとの非難をあびることになる綴方指導原理の転回を表明するものであった。

このことは，第二次宣言の立場が，綴方によって教師が子どもの生活や内面を知り結びつこうとする側面にとどまらず，互いを知ることで自己改造しながら生活それ自体とその内容が有する価値を発達させゆこうとする側面を持っていたことを意味する。それは，教科の構成やその教材を改めることだけでは満たされない学校教育そのものの存立を問う教育の立場であった。この第二次宣言からのみ，生活綴方の方法がおしだされてくることになるのである。

2. 『綴方読本』誌の評価基準

『綴方読本』は，「全日本各地の児童の新鮮なる優良綴方作品を網羅し，毎月，童話・童謡・自然観察・子供の生活・文の研究・漫画・少年新聞・学校劇等を掲載し，児童の慕はしき友として，その学習の向上をはかり，創造力を開発する」と，発刊の意図を示した。

同誌における『赤い鳥』誌の三重吉に相当する人物が，生活綴方の原型の提出者のひとりで，「生活綴方の始祖」とも呼ばれる小砂丘忠義[12]（1897～1937）であった。『鑑賞文選』誌の社会的・文化的立脚基盤については，すでに詳述されている[13]のでここではのべないが，これまで彼の綴方指導をめぐっては，「文章表現技術指導重視[14]」あるいは「1930年代初期の『生活重視』の立場から

後期の『表現技術重視』の立場へと綴方教育理論の展開の力点が移行している[15]」とされている。

小砂丘が文章表現に求めたものは，自分のことばで自分の考えたことや，話しことばをそのまま書きことばにすればよいという素朴なリアリズムではなかった。「自分の一生懸命の心を語る[16]」ことや「肝腎の作者のねらひどころ[17]」を第一に重んじたのである。こうした，綴方を綴る子ども固有の主体が表現されることを重んじた事実は，他の選評で次のようにのべていることからもわかる。

「書いてある事柄は，それぞれ珍しいことですが，それを見るのに，あなた方らしくあなた方でなければ考えられないといふ風に見なければいけないと思ひます。でないといゝ題材をつまらぬ文にしてしまふのです[18]。」

小砂丘の「評」は，子どもの綴ってくる生活の事実とそこで吐露される内面性によりそいながら，綴方の作者である子どもが自らの生活や経験に主体的にとりくみ，その事実をどうとらえたかという，内面への沈潜をくぐって表現されたものを求めていたといえる。それは，子どもが生活するなかで遭遇する事実をありのままにうけとめて書きうつすのではなく，自己の内面における吟味，思考，逡巡の過程を表現することを意味していた。

小砂丘の綴方選評基準は，三重吉の「ありのままに書く」立場と写実するという点では同一であったが，異質性を内包していたのである。前期『赤い鳥』誌ではみむきもされなかったであろうような表現の稚拙な作品を，小砂丘は新たな基準で評価し，推賞していくのである。

ところで，小砂丘が「もっとあなたらしく」「一生懸命の心」というばあい，それを支える児童観・発達観[19]は，子どもを潜在型において完成されているとみるものであった。子どもを社会から隔離され，保護される存在，「純真」な存在とみた三重吉や同時代の「自由教育」論者たちの童心主義的児童観とは対照的に，小砂丘にとって子どもは「ひがみも，かなしみも，おとななみにもってをるばかりか，おどろくべき客観をも，あわせもってゐる……悲壮な中にも，非常な叡知と達観[20]」を秘めている存在であった。こうした児童観を前提としていたから，選評指導では，生活のなかですでに教えられ完成されていることを，綴ることによって発見させていくことに焦点があてられ，教えられていることの価値を発見しそれを表出したものが評価されていくことになるのである。

小砂丘はこのころの論稿で，都市の綴方作品には無内容で，生活意欲のないものが多いが，それは都市生活の帰結であり，時代苦の投影ではないか，とのべ，地方農漁村の綴方に残っている「逞しく素朴なる原始子供」を綴方によって補強再生させることの必要を訴える。[21] 同時期の綴方には，不況で疲弊した社会状況を反映して貧窮した生活を綴ったものがあらわれるが，底に旺盛な「野性」をもち，労働（または遊び）の場で真剣に自然にたちむかっているさまを，また自然と格闘して得た喜びと悲しみを綴ったものがとり上げられていく。彼は生活事実に直面した際の生活意欲の強弱を綴方作品評価基準の要件としたのである。

以下に，それらの綴方の「評」をあげよう。「……といふ一句があったのをけずった。これは，こんなに夢中になって働いてゐる君の労働記には，不用意に使はれた言葉だ。文はいはゆる上手といふのではないが，気持よく仕事をしてゐる姿があらはれてゐる。」（「お茶刈」（静岡県，高二）の評，1930年12月号）「文に少しも，小細工したあとが見えない。文のねうちは，そんな小細工によってきまるのではなく，書かれて（ママ）文の中で，作者がどれだけ一生懸命，心一ぱいに生活して（不明）……うんさうんさひいてゆく心持もよくわかる。実にみんなが生き生きと動いてゐる。」（「川原の石拾ひ」（北海道，尋六）の評，1930年12月号）

秋田県で滑川道夫が指導した「通行するものの研究」[22] を最初に，そのご『綴方生活』誌読者教師層にひろがっていく「調べる綴方」，「科学的綴方」に関しては次のようにいう。「物尺をあててみること，秤にのせてみること，そんなことで綴方の作品は生まれては来ない。それに調べた結果，調べる努力等をマスターする独自の個が要求される。調べる行為や調べた事実は作者の情意によって統合されて表現されなければならぬ。物尺や天秤を使った人間が綴方を書くのである（傍点―引用者）。」

「調べる綴方」，「科学的綴方」は，それまでの「常識的な」綴方観をくつがえすほど画期的であり，三重吉をはじめ種々の方面から非難の対象とされたものである。だが彼は，文章表現指導を通して自然認識の指導までおこなおうとするこれらの指導過程を基本的に擁護していく。ただ彼にとって，「調べる」主体は「調べる」対象から主体性をもって自立していなければならなかったので，この過程をともなわないものは「調べた綴方」として批判することとなるのである。「調べた綴方」が対象に即して主体を埋没してしまうかのように結

果や報告に重点を置くのに対して，「調べる綴方」は対象から自立し，それらに立ちむかう主体に重きを置くものでなければならなかった。

それでは彼は，文章表現技術指導は全くおこなわなかったのだろうか。改題後特設された「文の研究」欄に多くみられるが，初期においても次のようにおこなっていた。

「△…のしるしから△…の所までで，入用でない言葉がかさなってはゐないか，考へてごらん。」(23)

「ただ二三ケ所，私が削ったり，改めたりした所があります。自分が読みかへして考へて下さい。それから，句読点をうつことを気をつけてほしい。」(24)

これらの他に，「綴方のけいこ」欄を設け，綴方の一節を掲げ，重複している言葉をとって書きうつすよう指示している頁がみられる。(25)

以上のように，小砂丘の指導は，芦田恵之助ら随意選題綴方における「自己を空しくする」ことによって「自己を綴る」立場や前期『赤い鳥』誌にみられた文章表現技術指導をおこない技術の優劣を基準として競わせる立場ではなかった。また『赤い鳥』運動の担い手となった現場教師たちに広くみられた「表現のための生活指導」とも異なり，その逆転である「生活指導のための表現指導」としてあらわれた。それは，文章表現技術重視か生活指導重視かという二律背反で論ぜられるものではなく，むしろ生活をとらえる文章表現技術を獲得することそのものを自己解放の道すじとする立場であった。生活指導のない綴方指導はありえなかったと語る小砂丘は『鑑賞文選』誌から『綴方読本』誌へ一貫性をもち深めるかたちで綴方選評のしごとをおこなった。彼は綴方を，「生活に生きて働く原則」を発見し，それらをつかむことによって自然とたたかう武器を得させるものと位置づけていたのである。

三，北方性論争時における文章表現指導の二つの類型と評価基準

1. 『綴り方倶楽部』誌の評価基準

千葉春雄(26)（1890～1943）主宰の『綴り方倶楽部』は，「みなさんの綴り方」「みなさんの詩」という，子どもが投稿した綴方と詩から選んだもので大半がしめられ，選評は，綴方を千葉春雄，児童詩を百田宗治（1936年2月より三重吉から離反した北原白秋）がおこなっている。その他に児童のための綴方講座である「文と詩のお話」欄や童話・科学記事を載せた「面白いお話」欄からな

っていた。

『綴り方倶楽部』刊行の意図について，「作品を世に問ふことは，自分の腕の客観的正位如何といふことになるのだから，ぜひ投稿を盛にして貰ひたいと思ふのです（傍点―引用者）。」[28]とのべ，実践的に役立ち，暗示を与えるものでありたいとした上で，「文のお話」欄に，一・二年生，三・四年生，五年生以上の児童へと分けて綴方指導をおこなっている。

まず「一・二ネンノミナサンニ」[29]では，見たり考えたり話したことを「ソノトホリカク」「ジブンデオモッタトホリニグングンカイテホシイ」と事実の叙述と心理的なものの表出を主張する。また自分の身のまわりや心のことについて「ダイヲタクサンヨウイシテオクコトガタイセツ」と取材の範囲の拡充を指導している。さらに，「カキタクテカキタクテタマラナイココロモチガ，ヨクデテキル文ガ力ノハイッタヨイ文」とのべる。最後の一文では，文章表現指導の概念が方法概念の位置にとどまらず目標概念となっている観をまぬがれない。この立場では，『赤い鳥』綴方の目標―方法関係の逆転として成立した「生活指導のための表現指導」論は成立しえなくなってくる。

「三・四年の人たちに　文のお話」においては「自分が見，聞き，考へた」ことの表出を主張し，そのあり方として「まっすぐ正直に」「自分の心を信じて」と指導する。そして，そのように文を書くことができれば，「文が上手になるばかりでなく，君たちも立派な人になっていくだろう。」としているところに注意したい。後述するが，これが小砂丘の評価基準と大きく異なる点である。また，感情表現を直接に用いずに「心持や様子を思はせるような書き方が一番いい」とし，子どもの心持や様子に対する関心よりも表現技巧上の工夫をどうするかという要素を強くおしだすものとなっている。

高学年に対する指導[31]では，「正しい文は，正直な，誠実の心からのみ生れてくる。自分の心を見つめ，自分の心に誠あるもの」を書き綴らなければならないとし，さらに「まづ自分の真心から物を見ねばいけない。ぢみに，がっしりと組んで押し切るのだ。その力があるかないかで，文のよしあしもきまるし，人間もきまるやうにおもふ。」とのべている。千葉の文章表現指導―評価過程の内実は，文の善悪の評価を人間評価に通ぜしめるような，なにか倫理的な要素をもつものであったといえよう。

ここには芦田恵之助の「指導の第一義は綴らんとする心を養うことである」，

「表現することによって促進させられる自己成長を目的とする」という主張と通ずるものがある。ただ大きなちがいは，芦田における「自己成長」が「文のよしあし」に重きをおくものにとってかえられていることである。

三・四年以上の子どもたちには「調べる綴方」推奨の観点をうちだし，実験・観察の記録としての綴方をねらっているが，小砂丘が，「調べた綴方」を批判して，主体のありようを問題にした点との対比は，のちに論じよう。

それでは具体的に，『綴り方倶楽部』創刊号に選ばれた「ちゃぼ（高一）」[32]という作品につけられた「評」をみてみよう。

「（ちゃぼが）『好きだ』といふ心から出てゐる（ところがよい）。その『好きだ』といふことが，生活の中に融けきって表現されてゐる。……文はぢみで，あぶなげがない。とさかに御飯粒をつけたり，お酒を呑したりするやうな変ったことを書いても，それがこれみよがしに響かぬのは，つまりは，作者が，地味な人がらである為だろう。これでも，文は心がもとだといふことが分ると思ふ。」

文が「心から出てゐる」「心がもとだ」という評語や，その心が「生活の中に融けきって表現されてゐる」ということばにみられるように，千葉は，書く題材と心がつながっている点において作品を評価するのである。

1934年，第一巻十号を出すころになって「粒ぞろひに質がぐっと向上した」という作品群のなかで千葉の絶賛する「筆入れ（尋四）」の評は次のようなものである。

「生活してゐることがよいので，それが，一つの力となって，文にあらはれてゐるやうです。生活の大切さは，これで，よく分って下さると思ひます。生活の大切さを忘れて，よい文を書かうといふ人は，枯れた木に，実をならさうといふのと同じことです。」[33]

ここで千葉が生活と文のよしあしとの関係を指摘しているが，彼の文章表現指導と「生活指導」概念との関係に関する主張は次の文に要約される。

「つぶさに自己の生活の上に経験した知識なり感情なりが，ほんとの文のよさを決定する。だから，生活をこやせといった，豊かにせよといった。」[34]

これは明らかに「表現のための生活指導」といわれたものに照応する論の展開になっている。この観点から千葉は，自分のものになった「生活」を記述せよといい，単なる生活の事実ではなく，「解釈・意味が附与」された文を「生

活のある文」として推奨することとなるのである。

1935年３月ころになると，毎月同誌では700篇以上もの作品から30篇ほどを選んだといわれる。学年別に短かい「評」をつけ，題材や文の型で特に問題とされるものを前にとりだし長い「評」をつけるようになる。

このころとり上げられた「大阪に行った母の理由（尋五）」[35]は，広島から大阪に出かせぎに行った父からの送金がとだえ窮乏をしいられながら家族がそれぞれに働くさまを，また母もいよいよ働きに出なければならない事情やその心情を細かにえがいたものであったが，千葉は次のようにいう。

「力の籠った綴り方とか，心が強く動いた綴り方とかは，かういふ種類の綴り方を言ふのです。……作者松原君は，何もしないでゐるのか，かういふ風なら，『僕で出来るものを』と考え，実際にやらなかったのか。……読んでいく中に，涙の出るやうな綴り方です。松原君のあらん限りの力を感じられます。」

この「評」では，子どもの存在する生活の事実について理解を深め，生活を切りひらいていくための意欲を喚起する指導をおこなっている。こうした作品と「評」は「調べる綴方」に属するものを含め，たとえば次のようなものにみられた。

「よしきりとり」（千葉県　尋三　1935年８月）

「立ち上る心」（福島県　高一　1935年12月）

「目」（宮城県　高二　1936年４月）

2.『綴方読本』と『綴り方倶楽部』における評価基準の異同対比

千葉について前節にみたように，学年を追って書かれた小砂丘の綴方指導過程論を検討しよう。彼は，尋一・二の綴方に「標準」を定めることを「不可能に近い難事」としながらも，①自分でかいたものが自分で読めること②事実どおりであるかどうか③何が書きたくて書いたか説明できること④文の約束として。と「　」だけは二年生までに会得させる，の四項を最低限の「標準」とした。だが，それに続けて「うんとあばれさせうんと物を見させ，作らせ，後のたくはへをみっちりしこんでゐるべき時代である」[36]と，この時期の指導をおさえている。

「尋三綴方指導の実際」では，「技術的方面に止らず，推敲は物の見方の方面―観察の仕方でなく，解釈の仕方―にまで及ぼさなければならない。だが，その方法に至っては自ら順序があり，各児童個人について然るべき標準がある」[37]

とのべている。また「尋三推敲の基準」として「もっと見よ，もっと書け，こんな事を忘れてゐるのではないか」という「綴方へまでの指導を多分にもった形式」であることがのぞましいとし，①一番書きたいことがつよくかけているか②時間の順は正しいか③ほかの人によんでもらってもわかるか④。や「　」のほかに文段のきり方の指導をはじめる，としている。

「尋四綴方指導の実際」では，取材の範囲を個人生活から社会生活へ，共同生活へと方向をとるよう指導し，「生活の態度としてはもっと頑健に，もっと明朗でなければならぬ」[38]とのべている。

三・四年生に千葉が「まっすぐ正直に」「自分の心を信じて」「心持や様子を思はせるやうな書き方（を）」と指導していたのと対照的に，小砂丘は，もっぱら子どもの生活事実と生活態度，それをとらえる視点の拡大を問題としていたのである。

小砂丘も千葉も「調べる綴方」推奨にみられるように，子どもの自然認識の指導を生活を書くことによっておこなおうとした。しかし，小砂丘が「一生懸命の心」「もっとあなたらしい心持」という時，綴方の作者である子どもが綴る対象に対して自立し，固有の主体性をもった表現者でなければならなかったのに対し，千葉が事実の叙述と心理的なものの表出をいうばあい，あくまでもその心は「書く材料とつながった」ものでなければならなかった。

それは，「教育は長い間文芸に対して鎖国の防備をしてゐた。その習慣が，文を功利的に見ることは出来ても，作者にも読者にも，通ずる心緒の上に解釈することが至難である性癖を与へてしまった」という文芸主義的な文章観からきているものであった。このことは，試行錯誤をくりかえしつつ「芸術的，実用的，科学的な側面を包括」[39]しようとする他の「調べる綴方」論者たちの立場とはことなり，その芸術的側面を前面におしだすものであった。彼が，「おもひどうりかけたであろうか」「どこが自分の文の焦点であらうか」というばあい，こうした意味において「心を語る」ことを強調していたとみてよいであろう。

千葉の生活指導論は，以下の通りであった。「綴り方は綴り方としての独自の領域をもつ限りに以て（ママ）綴り方が任とせねばならぬ生活指導の独自的分野も考へ得られる。文の中に道徳的ならざる記述があった場合，たとへば物を盗んだ経験とか，家庭内の不和の告白とでもいふべきものがあった場合に，それが綴り方の上の指導の対象となるか，私は原則として，かういう意味の生活指導は，

綴り方に於ての任務でないことを信じたい。」[40]

千葉は綴方における生活指導を「事件や材題を（中心とする生活相を），客観視させる指導」に限定する。彼の生活指導論は，近代公教育体系の教科をたてておこなう方法のフレーム内にあり，前述した第一次『綴方生活』の立場に近いものであったといえる。

こうして「どんな生活が心に残ってゐるか」といって〝忘れがたい生活〟〝思い起こされる生活〟〝なつかしい生活〟を対象に綴らせるものになっていき，その指導―評価体系は「表現のための生活指導」の系譜を形成していくことになるのである。

ここに明らかに，小砂丘の第二次宣言の世界との立場のちがいをみることができる。小砂丘が問題としたのが，子ども固有のフィルターを通した子どもの客観的な生活事実であり，その生活認識と生活能力を育成・組織しようとするものであったのに対し，千葉が問題としたのは，「自分のものになった」静的・観念的な生活だったのであり，そうであればおのずと，子どもの生活事実を知ることはできてもそれらを引き上げ組織していくベクトルは微弱なものとならざるをえなかったのである。

両者はともに，生活認識の指導と生活能力の育成・組織を綴方に位置づけていたかにみえたが，綴らせる体系を系統づける段階になると，文章表現観，「生活指導」概念，児童観のちがいにより指導―評価体系は微妙に違ったものとなっていたのである。この違いは，教育指導体系の二つの系譜，いわゆる小砂丘につながっていく「北方系」と千葉の系譜をひく「南方系」を形成していくことになるのである。

四，おわりに

以上，「北方系」「南方系」といわれる文章表現指導―評価過程の相違を，『綴方読本』誌と『綴り方倶楽部』誌の「選評」を考察することにより明らかにした。

小論では『綴方生活』第二次同人で児童雑誌の選評のしごとをしていた小砂丘のばあいをみてきたが，同誌で同じしごとに手をそめた人物が他に数人いた。そのなかには「生活教育，生活綴方にあっては，いかなる教科といえども，本質的に教育の中心に位置することはできない。教育の中心は『生活』なの

だ。(41)」として「生活指導のための生活指導」ともいうべき，文章表現指導の軽視による綴方教師解体論を説く立場があった。これは児童の村小学校退職後，黒住信仰を支柱にして鳥取県で教育実践をおこなった峰地光重によるものであった。

この立場と前二者との指導一評価過程の相異，そして，こうした立場を表明する教師の社会的，文化的基盤を解明し，その「生活」概念がいかなるものであったのかを探ることが必要となる。このしごとは，日本の教育方法を支える文化的土壌にわけ入り，近代学校の教育体系を受容すると同時に，これに吸収されつくされない教育体系を伝承している共同体や家族の教育を俎上にのせないではすまないものになってくる。それは今後の研究課題とする。

(注)

(1)「生活綴方」初出の文献は，加藤周四郎「生活綴方の現実の問題」『北方教育』1933年1月号。

(2) 民間教育史料研究会『民間教育史研究事典』，評論社，1976年，88頁。

(3) 小砂丘忠義『私の綴方生活』，モナス，1938年，34頁。

(4) 国分一太郎「文壇的批評と教壇的批評」『教育・国語教育』，1936年11月号。

(5) 中内敏夫『生活綴方成立史研究』，明治図書，1970年。民間教育史料研究会『教育の世紀社の総合的研究』一光社，1984年。

(6) 千葉春雄ほか座談会「新時代への動き」『綴方生活』，1930年4月号。

(7) 中内　前掲書　632頁。

(8) (7)と同じ　20頁。

(9) 1933年，鳥取県に結社，同人に佐々井秀緒，稲村謙一ら。機関誌は『国・語・人』，『瞳』。

(10) 中内　前掲書　836頁。

(11) 綴字，習字，書牘文（1872年小学校教則，1873年師範学校教則）が「作文」（1881年小学校教則綱領）となり，1900年小学校令改正にて「綴方」となる。この改称過程で，訓育の過程とは別の文章表現技術獲得の体系とされてゆくのである。

(12) 小砂丘忠義の生涯は津野松生『小砂丘忠義と生活綴方』，百合出版，1974，を参照のこと。

(13) 中内　前掲書　491頁。

(14) 石川宏子「小砂丘忠義遺稿集を読んで」『作文と教育』，1977年3月号。

(15) 碓井岑夫「小砂丘忠義の綴方理論とその転回」『教育運動研究』，1977年7月。

(16)「今月の綴方」『鑑賞文選　尋四』，1930年1月号。

(17)『鑑賞文選　尋四』，1930年1月号，30頁。

(18)「今月の綴方」『鑑賞文選　尋五』，1930年7月号，28頁。

(19) 中内　前掲書　519頁。

(20)『鑑賞文選　尋四』，1927年2月号，7頁。

(21) 小砂丘「生活指導と綴方指導」『綴方生活』，1933年８月号。
(22) 『綴方読本』，1931年１月号。
(23) 『鑑賞文選　尋四』，1930年２月号「たかし乗り」の「評」。
(24) 『鑑賞文選　高等科』，1930年１月号「芋掘の一日」の「評」。
(25) 『鑑賞文選　尋四』，1930年２月号，21頁。
(26) 千葉の経歴は「作文教育史料(２)」『作文と教育』，1956年９月
(27) 雑誌上には千葉の名になっているが，松本正勝「千葉春雄と『綴り方倶楽部』」，金子書房，1952年によれば，松本をはじめとする千葉門下のしごととされる。
(28) 「お願ひ数々」『綴り方倶楽部』，1933年11月号，59頁。
(29) 『綴り方倶楽部』，1933年４月，12頁。
(30) (29)に同じ，30頁。
(31) (29)に同じ，52頁。
(32) (29)に同じ，54頁。
(33) 『綴り方倶楽部』，1934年１月号，24頁。
(34) 千葉春雄『児童の生活に即したる綴り方の鑑賞』，目黒書店，1924年。
(35) 『綴り方倶楽部』，1935年３月号，22頁。
(36) 小砂丘『私の綴方生活』前出　390頁。
(37) (36)と同じ，394頁。
(38) (36)と同じ，423頁。
(39) 国分一太郎「調べる綴方への出発とその後」『綴り方倶楽部』，1934年３月号。
(40) 千葉『生活させる綴方指導』1928年。
(41) 峰地光重・今井誉次郎共著『学習指導のあゆみ　作文教育』，東洋館，1957年。

（筆者の住所　〒359　所沢市下安松450　日向ハイツ８号）